

---

## 日本NIE学会会報 第11号

---

日本NIE学会事務局  
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2  
国立大学法人横浜国立大学教育人間科学部  
重松克也 研究室  
TEL/FAX 045-339-3433  
E-mail ka-shige@ynu.ac.jp

---

### NIE学会第六回大会が福岡で開催されました

去る11月15日(土)、16日(日)の両日にわたって、日本NIE学会第5回大会を、福岡教育大学において開催いたしました。全国各地からNIEの実践や研究に関心をよせる教育関係者、大学関係者、報道関係者など約100名の参加者がありました。

第1日目は、まず正午より理事会が行われ、会計、事業計画、学会の運営方針などについて話し合われました。その後13時より、全体会会場にて、「NIEで“活用”の学力をどう高めるか」をテーマにシンポジウムが行われました。3名のシンポジストによる時宜を得た提案について、指定討論者の枝元一三先生(日本新聞教育文化財団)におまとめいただきました。休憩の後、「日本型NIEの理論化をめざして(3) □ 典型的な実践事例の分析を通して□」をテーマにした課題研究Ⅰが行われ、3本の発表及び阪根健二先生(鳴門教育大学)、木村博一先生(広島大学大学院)の分析をもとに意見交流がなされました。17時15分からは年次総会が行われ、会計、事業計画、学会の運営方針などについて了承され、1日目の日程を終了しました。なお、18時15分からはキャンパス内で懇親会が行われ、それぞれの研究状況や日頃の実践ほか様々な話題に花が咲きました。

第2日目は、まず、5会場にて合計15本の自由研究発表が行われました。最新の研究成果が発表され、それに対する活発な討議が展開されました。続いて、全体会場にて、「教科教育におけるNIEの在り方 □ NIEの教科カリキュラム化を図る□」をテーマに課題研究Ⅱが行われ、社会科、算数、理科3本の発表と意見交流がなされ、12時30にはすべての日程を終えました。

シンポジウムや課題研究ほか大会の全体を通じて、本大会テーマ「優れたNIE実践の理論化を目指して(2)-NIEにおける“活用”とは-」を意識したご発表や建設的な意見交換が行われたことにより、多くの成果を挙げる事ができたのではないかと思います。十分な運営ではありませんでしたが、ご参会の皆様のご協力によりなんとか無事に大会を終了することができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

それでは、来年度開催地である東洋大学（東京チーム）にバトンタッチをしたいと思います。  
（日本NIE学会第5回大会実行委員会事務局 福岡教育大学 豊嶋啓司）

## 各会場からの報告

### ◎ シンポジウム

大会初日のシンポジウム「NIEで活用の学力をどう高めるか」では、新学習指導要領がその必要性を強調し、これまでNIEが自明として扱われてきた新聞の“活用”について議論が交わされた。小学校実践者の立場から木村宏之氏により、記者との交流による活動から記事が書かれた意図や背景を学ぶ実践が報告された。高等学校実践者の立場から山田明氏より、地域活性化活動を新聞化するサービスラーニングの実践が報告された。研究者の立場から赤沢早人氏により、PISA型読解力を前提に学習指導要領が求める“活用”を習得／探究との関係から整理したうえで、①学習過程化（「情報の取り出し」、「解釈」、「熟考・評価」）、②新聞（信頼できるメディア）の相対化、③他メディアの許容、問題意識 3点を明らかにした。

指定討論者枝元一三氏より、「質の高い活用」をキーワードに整理するため以下の問いが投げかけられた。

木村氏へ：「記者との交流、課題は何か？」、「基礎基本はなく、すぐ活用か？ことばの取り出しなども有効だが？」

山田氏へ：「校内ではどうするか？高校では受験対策としてNIEは相反するか？進学校ほどNIEを拒絶していないか？NIEで思考力・判断力・表現力が育まれるならば入試に有効であるはずだが？」

赤沢氏へ：「赤沢氏提案の活用モデルで木村氏、山田氏両実践を整理するとどうなるか？」  
また、フロアから、目先を変えるための用語“活用”のみに翻弄されNIEが最も大切にしてきた“探究”が軽視されていないか？といった疑問が呈された。

まとめとして、まず“活用”を定義づけて議論する必要があること、NIEはいわゆる“活用”学力育成をすでに継続して取り組んできたこと、さらに質の高い活用をNIEの目標とし、実践で示す以外にないこと、3点を枝元氏が整理した。（コーディネータ 豊嶋啓司）

### ◎ 課題研究 I

本課題研究 I では、研究委員会の企画として、一昨年度の新聞社におけるNIE実践の分析、昨年度の実践家の事例分析に引き続いて、本年度は、小・中・高等学校における典型的な実践事例の分析を通して、「日本型NIEの理論化」を試みた。

具体的には、小・中・高等学校の経験豊富な実践者である、岸尾祐二氏（聖心女子学院初等科）、前野勝彦氏（高松市立光洋中学校）、堤隆一郎氏（広島県立広高等学校）に、①自身のNIE実践の歩み、②その中で代表的だと考えられる実践の報告、③実践の振り返り、以上の3点について報告してもらった。岸尾氏は、1990年度の「国際理解教育を深めるにNIEの取り組み」と、最近の「新聞でPISA型読解力を育てる試み」を取り上げて報告された。前野氏は、全校で取り組んでいる新聞投稿（意見文）と川柳の取り組みを、また堤氏は、前任校である呉三津田高校における「総合的な学習の時間」の「GAYA」の中での書評を扱った事例を報告された。

これらの報告を受けて、阪根健二氏（鳴門教育大学）と木村博一氏（広島大学大学院教育学研究科）が、①実践の特色（よさ）、②特色の背後にある理論、③理論に基づく改善点、以上の3点を中心に実践の分析を行った。

フロアからは、「生涯学習としてのNIEの可能性」「全校ぐるみの取り組みとなるための手立て」「投稿欄の字数制限による表現形式の画一化克服の方法」などについての質

問・意見が出された。最後に、各提案者から、優れたNIE実践開発のこれからの方向性についての具体的な提案がなされた。

本課題研究を日本型NIEの理論化という観点からその意義をまとめると、三者ともに共通して、次のような視点からNIE実践の開発が目指されていることが明らかになったことである。すなわち、生涯学習の基盤づくりとしてのNIE、教科の枠内でのNIE実践の限界を克服するための方法の模索、思考力・判断力・表現力というつながる学力を育成するNIE学習、新聞の読み解きという情報受信と新聞形式での意見や考えの発信という2つの方向を連結させた授業づくりなどである。 (コーディネータ 小原友行)

## ◎ 課題研究Ⅱ

課題研究Ⅱは、「教科教育におけるNIEのあり方□NIEの教科カリキュラム化を図る□」をテーマとした。「総合的な学習の時間」の創設により、NIEそのものを目的とした実践をここで展開することが可能になったが、教育課程全体からみれば一部にとどまっている。教科の学習指導におけるNIEも、特別なものとして実践されることが多く、それぞれの教科の教育課程での適切な位置づけは、これからの課題である。このような現状把握をふまえ、教科でのNIEをカリキュラムの視点から、とりわけ、各教科固有の条件とNIEの関わりをふまえた発表をいただき、考察を深めようとしたものである。

角田将士氏(立命館大学)は、社会科の立場から、「社会科授業における新聞活用の論理□方法としてのNIE□」と題して、「なぜこの時間にその新聞を活用せねばならないのか」について説明責任を果たす必要があることを提起し、社会科ではNIEを「内容をよりよく伝え」「設定された目標をよりよく達成するための」「方法(=手段)」として位置づけることを主張した。その事例として「社説・コラム欄」を活用した「内容理解型」「内容批判型」「批判型」の3パターンを提示した。これらをふまえ、NIEが独自の目標と内容を備えたカリキュラムを構築するためには、教科としてのNIEの新設、あるいは「総合的な学習の時間」への位置づけが妥当ではないか、と提言した。

田中敬子氏(宝塚市立すみれが丘小学校)は、算数科の立場から、「理解と表現を育む算数科グラフ指導での新聞の活用とその効果□NIEの教科カリキュラム化を図る□」と題して、小学校4年生と6年生の新聞作りの事例を具体的な成果(新聞)を提示しつつ紹介し、児童が調べたことを効果的に伝えるために、さまざまな様式のグラフを、時には未習のものも含めて紙面にまとめようとした成果を述べた。また、新聞記事のグラフの読みとりを通して、「関数的な見方」を育てられたことも報告された。これらをふまえ、小学校4年生から6年生までの、表やグラフ表現活動をNIEで活かす見通しが示された。花村幸次郎氏(宮若市立若宮中学校)は、理科の立場から、「中学校理科におけるNIE導入に関する一考察」と題して、科学における「客観性」概念や、理科での「活用」概念について述べ、実践を通して、「知識を可視化させ、不明瞭な部分を意識化させる」「他者と新聞を介して対話することにより自己の認識や行動の意味づけが可能になる」ことなどを「道具としての新聞の有用性」として指摘した。

討議では、各教科の本質についての議論や、前提(学習指導要領への意識)についての指摘がなされた。また、教科の学びの発展としてのNIEのみならず、NIEが教科の学びをより豊かにすることが示された、との指摘もあった。じゅうぶんな時間を確保することができなかったが、発表者の鮮明かつ先鋭的な提案により、参加者の問題意識が活性化されたのではないだろうか。 (コーディネータ 河野智文)

## ◎ 自由研究発表

### 第1会場

#### 1. 「多元的な価値判断力を育成する国語科でのNIE学習 ―国語の教材と新聞教材とを接続した単元―」二田貴広（奈良女子大学附属中学校）

タイトルの「多元的な価値判断力」とは、情報を分析して発信者の〈価値判断〉を読みとる力と、さらにそのもとにある〈価値観〉を見出そうとする態度、他者のさまざまな〈価値判断〉と対比して、自分の〈価値判断〉を内省的、論理的に分析し、それを他者にどう伝えるかを判断する力を意味する。発表は、このような力を育てるメディア・リテラシー教育と国語の学習内容とを関連づけた授業を開発し、さらにカリキュラムの開発をめざす研究の一端を報告する内容であった。

この実践研究のユニークさは、新聞記事を批判的に読む態度と力を育てるための手立てとして、〈記事に書かれていない取材情報を考えることで、記者が伝えたかったことをより明確に捉え、それによって情報を鵜呑みにしない判断力を育てる〉という読みの観点を設定した点にある。指導の成否のカギは記事の選択にあることがよく分かる報告であった。

#### 2. 「『読解力』向上をめざした中学2年国語の授業 ―じゃんけんて読み解く新聞記事―」三上久代（札幌市立月寒中学校教諭・北海道教育大学大学院生）

記事の情報価値を読み取らせるために、その情報意味に結び付く体験をさせ、その効果を確認した実験的授業の報告である。将棋の加藤一二三棋士1000敗の記事を読み、その意味をどう評価すべきかを考えさせるため、10人勝ち抜きじゃんけんゲームを体験させる。その体験から1000敗することの大変さを想像させることで、この記事から「負ける」ことの〈負〉の意味を、プロ棋士として1000回もの敗戦に耐えたことの積極的意味に読み深めさせることができた。その成果として、新聞情報の深い意味を捉える面白さを認識させたことをアンケート分析で確かめている。情報の理解・認識の前提には読み手の体験・知識が必要である。それをどう用意すべきかを示唆する授業研究である。

#### 3. 「情報認識学習の構想と実践 ―単元『情報とは何かを考える』を中心に―」植田恭子（大阪市立昭和中学校）

「新聞で学ぶ」学習に比べて、「新聞を学ぶ」（新聞の言語情報とはどういうものか）の学習はまだ不十分である。本研究はその状況を切り開くべく、メタ情報認識を中心目標とする学習を、単元の年間カリキュラムの構想のもとに実践する研究途上の報告である。様々の比較読みの観点を用意し、（例えば、8月6日・15日の紙面構成を昨年の紙面と比較する。福田首相辞任の記事と安倍首相辞任の報道の比較、版の違う新聞の比較など）、情報の送り手の意図を読む学習を重ね、「記者の取材のプロセス・情報創出の経緯を読み解く」という学習に至る。その学習で、「ニュースとは何か。」「客観的事実を伝えることは可能か。」などを考えさせ、「新聞というメディアの特性」を捉えさせる。年間カリキュラムの学習過程にきめ細やかな言語学習、表現学習が仕込まれ、情報言語の理解・伝達活動を通して、実感的な情報認識がなされたことがうかがわれる実践研究である。

（司会 小田迪夫・陣川桂三）

### 第2会場

#### 1. 「思考・判断・表現力の成長を保障するNIE社会科授業 □ 中学校単元「石見銀山の世界遺産逆転登録の秘密を探ろう」の実践から□」

小原友行（広島大学大学院教育学研究科）、田口紘子（広島大学附属三原中学校）、大國沙輝子、池田礼、兼原昌大、○後藤健次郎、中野和子、中村光佑、藤岡弘輝（広島大学大学院生）（○は発表者）

「石見銀山の世界遺産逆転登録の秘密を探ろう」と題した本発表は、「思考力・判断力・

表現力」の成長を保障するためのNIE社会科授業の構成論を提案」するものである。

「学習展開自体を新聞活用の方法と対応させ、事実型、背景型、意見型という順で異なるタイプの新聞記事を読み進め、単元の最後に新聞づくりを行う学習」の過程が詳細に報告された。

石見銀山の世界遺産登録に至る経緯が「新聞記事も豊富に蓄積されている」ことから「出来事背景にある「逆転」の物語や、登録への人々の思い、遺産自体の価値、登録後の社会の変化など、出来事の裏側を読み解かせる」のに適しているとの教材観が示された。

学習評価については、あらかじめ授業の中で採点基準が明示されている「評価表」を生徒に提示して「到達目標を把握させたうえで記事を書かせ」ることで、授業評価の方法を明確にして学習に取り組ませたことが示された。

「授業前後の生徒の成長」は、「プレ・ポストアンケート」を実施して授業効果が確認されたことが示されたことから、「生徒たちは、この単元で学んだ新聞活用の方法を繰り返しながら、様々な社会事象に対してある時点だけのことではなく、今後についても考え、互いに学習を深めあっていくことが期待できる」と結論づけられた。

会場からは「なぜ石見銀山をテーマにかかげたのか?」「つまづきのみられる生徒への配慮は?」などの質問があり、活発な意見交換がなされた。

## 2. 「新聞を活用し社会事象の読み解きに重点を置いた社会科学習の構想 □ 小学校社会科学習を事例に□」

橋本祥夫（京都教育大学附属京都小学校）

小学校5年生を対象にした2つの実践が紹介された。(1)「異なる意見の新聞記事をもとに社会事象を読み解く社会科学習の取り組み」と(2)「新聞スクラップをすることにより社会事象を読み解く社会科学習の取り組み」である。

(1)は「バイオガソリンを通して考えるエネルギー・環境・食糧問題」をテーマに、賛成派の意見と反対派の新聞記事を提示し、「バイオガソリンを使うことの利点と欠点を踏まえて、環境問題、エネルギー問題、食糧問題の諸問題に対処するために、バイオガソリンをどのように扱っていけばいいのか」を考えさせる授業が展開された。バイオガソリンの使用について多面的に考え、「子どもたちなりに解決方法を模索する姿」がみられたことが報告された。

(2)は「産業学習のまとめとして、新聞スクラップをし、その産業の現状と課題を考えていくことが、社会事象を読み解くことにつながる」と考えて、地球温暖化をテーマに取り組んだものである。実践後のアンケートからは「社会の出来事がよくわかるようになった」「自分の意見をしっかり考えるようになった」との児童の変容が紹介された。

会場からはバイオガソリンの賛否の記事は「小学生にとっては少し難しい記事だと思いが、どのような工夫を行ったのか」、「社会事象を読み解くための理論化と普遍性をどう考えたらよいか」などの質問が出され、意見交換がなされた。この実践を「年間のカリキュラムにどう位置づけるか、ぜひチャレンジして欲しい」との激励の声があった。

## 3. 「NIEの源流としての新聞学習 □ 1950年の読売新聞社による実験の分析□」

稲井達也（東京都立小石川中等教育学校／東洋大学非常勤）

GHQの統制下にあった1950年、読売新聞社によって行われた「新聞を活用した授業の実験」について、その実験の概要と考察とが発表された。

予備調査としてのアンケートを実施し、学習の効果を測定するための中間テストと終末テストが実施され、「科学的な方法と態度に重きを置いて、学習効果を客観的に把握しようとした」ことは、「実践」と呼ばずに「実験」と称したことからその意図が認められるとの紹介があった。

「中学校では社会科の時間を利用して実施され学校が多く」、「国語科の立場から取り上

げた」のは13校中1校のみであったが、「読むことにはじまる新聞学習が、国語教育の領域を通らなければ成立し得ないことはいまでもない」とし、「市民としての個人が毎日目を通すべき新聞を国語教育の見地から検討し指導することは、新教育に課せられた一つの研究問題として注目しておきたい」と報告書が指摘していることが紹介された。

1950年当時、新聞教育の「困難性」としてあげられていた課題や賛否両論ある問題が、「時代状況が大きく異なりながらも、今日のNIE実践に通じる」ことから、「NIEと学力向上・読解力向上との関連性、教材・学習材論などの基礎的な理論をつくりあげていく」ためにも、過去の実践から学べることは少なくないとの提案がなされた。

「この実験が実施された背景とGHQとの関係」や「中間テストとその報告書の存在の有無」、さらには「第1回新聞教育研究協議会とその後の全国新聞教育研究協議会（全新研）との関係」などについて活発な意見交換がなされた。（司会 谷田部玲生・有馬進一）

### 第3会場

学年あるいは全校で取り組んだダイナミックな実践報告が2つ、NIE実践における認識発達筋道の解明しようとする意欲的な研究が1つ、と意義ある発表が相次いだ。

#### 1、中 善則（岸和田市立土生中学校）「NIEにおける市民性の育成 □ 社会的課題を追求する社会科・総合学習の取り組み」

新聞を読解するための知識やスキルを習得させた後、「赤ちゃんポスト」の記事を取り上げて学習し、社会福祉士の方をゲスト・ティチャーに招いて当事者意識を喚起させた上で、学習報告書を作成しそれを後輩や地域に配布した実践であった。また本実践は学ぶ意欲や生き抜く意欲が容易に持てずにいる生徒達に対して、NIEを通して市民性のみならず人間性（生き方を考える）を育むために学年の教員で取り組んだ実践であった。生の現実・他者との出会い、情報の発信（社会参画）を通して学びを喚起できた成果も報告された。

#### 2、中嶋 利春（愛知教育大学大学院生）「NIEを通じた社会認識形成 □ 中日新聞社の新聞切り抜き作品づくりを例に □」

社会科教育における授業づくり研究の蓄積に対する検討と新聞切り抜き作品に対する定量的な分析を通して、社会認識発達筋道の解明しようとする研究が報告された。授業づくり研究では理念的に設定されがちである社会認識発達筋道に、児童生徒の作品という具体的な作品を分析対象とした詳細な分析を加味することで、複線的な発達筋道を明らかにしたという報告であった。

#### 3、上田 正純（美馬市立芝坂小学校）「小学校におけるNIE実践 新聞に親しむ児童を育てる」

長年の蓄積に裏付けられた知見に基づきながら、NIEを通して現実の世界へ目を開いていく実践の実際（学校づくりも含めて）について報告された。新聞コーナーづくり、指導者による記事の紹介、「できるだけ多くの新聞を読み合わせる」ことを指導の基本方針として位置づけ、「新聞記事は小学生には難しいが、あえて難しいことだからこそ新聞を使うことで子どもを伸ばせた」と、新聞記事の音読に取り組みさせることで読みとりのスピードアップのみならず全国学力調査で大きな成果を示せたことも報告された。

各報告に対する質疑を通して、「NIEが学力や生きる力を育む」ことを単なるお題目で終わらせない実践が着実に進展していることや、その育みを理論的にとらえる大切さを改めて確認できたのは、私たち司会だけではなかったように思われる。

（司会 白井淑子、重松克也）

### 第4会場

自由研究発表第4会場では、大学からの研究発表がおこなわれた。5回目を数える大会

で、はじめて大学でのNIE実践にもとづく報告だけで一つの分科会ができたことになる。一番新聞を読んでいないのは大学生であり、しかももっとも新聞を読まねばならないのも大学生であることを考えると、これは今後の大学でのNIE実践の拡大に向けて画期的なことであるといえるだろう。

畿央大学健康科学部の西田絵美氏は、「健康」に関わる専門職業人養成という大学の特性から、社会の「健康問題」への関心を高めることをねらいとした基礎教育段階でのゼミにおけるNIE実践をもとに、新聞記事の発表会を重ねることが、「健康」についての理解を深めるだけでなく、自分の考えを相手にわかりやすく伝えようとする他者への配慮や、自分と違う考えをもつ他者の存在の気づきという点でも大きな効果があったことを報告された。

大阪経済大学の樋口克次氏は、長年にわたる様々な授業での新聞活用の実績をもとに、大学教育の目標である、①市民としての自立、②専門的な学習・研究、③将来のキャリア形成に向けて、新聞は最善の生きたテキストであり、そこに大学教育における新聞活用の意義があると述べられ、そのためには新聞を読む機会を増やし、新聞を読むことの必要性を明示することで大学生に新聞を習慣化させること、そして小中高から大学というNIEの接続・積み上げが必要であることを指摘された。

大学として初の実践校に指定された近畿医療福祉大学の勝田吉彰氏は、専門教育における新聞活用の意義と可能性について報告された。医療・福祉の現場で働く職業人に必要なのは専門的な知識と高齢者・障がい者の気持ちとをつなぐ能力であることから、新聞の医療相談欄の相談への回答を考えさせる授業や、新聞投書から高齢者・障がい者の気持ちを理解させる授業などの実践例を紹介しながら、勝田氏は職業人にとって必要な社会性の涵養、他者の気持ちの理解などの点で、専門教育の場面でも新聞活用は有意義であることを述べられた。

会場も交えて活発な質疑と意見交換がなされたが、全体として感じられたのは、これまで未開拓であった大学でのNIEの意義と可能性について、本格的に取り組むべき時期に来ているのではないかということであった。大学でのNIEが活発化すれば、またそこへの接続という意味で小中高のNIEの発展にもつながるものと思われる。

(司会 祇園全祿・平石隆敏)

## 第5会場

服部文彦氏(愛知県立岡崎商業高校)は「高等学校における進路指導の在り方と面接指導法□NIEと秘書教育を活用した効果的な面接指導法の一考察□」の題目で、前任校の名古屋市立若宮商業高校で取り組んだ実践を報告した。新聞記事を読み、新聞の構成を学び、内容を理解する取り組みを行った結果、生徒の集中力、理解力、伝達力が高まり、秘書検定と就職の面接指導に大きな効果を挙げたと説明。さらに生徒らに地元スーパーの社長に「企業の求める人材」についてインタビューさせるなどして進路指導した。秘書検定1級で生徒が満点で合格し、文部科学大臣奨励賞を受賞した事実を示し、NIEは就職面接指導に有効であると結論付けた。

光武正夫氏(唐津市立第五中学)は「新聞でエンカウンター□いつでも、どこでも、誰でも実践できる社会力を育むNIE□」の題目で、生徒がみんなに伝えたい新聞記事や写真を選び、感想や意見を書くという実践を紹介した。エンカウンター(encounter)は「遭遇する」「出会う」というだけでなく、相互交流し、仲間作りをする意味も込められている。この取り組みは、教師にとっては、誰でも実践可能で、生徒に社会に対して関心を持たせることができ、生徒や児童にとっては、自分の考えを余り抵抗なく表現でき、新聞を介して他者と交流できるメリットなどがあったとした。NIEでは教師が新聞を調達するのに苦労することが多いが、光武氏は学校や家庭にある古新聞を集めて、授業で使っている。新

しい新聞ほど学習者の関心は高まるとされているが、数日前の新聞でも十分に効果の上がることを示した。

赤沢早人氏（奈良教育大学）と寺岡聖豪氏（福岡教育大学）は「小学校における『新聞づくり』活動の意義□宗像市立大島小学校での実践を中心に□」の題目で、同小の5年生4人を対象に、同小の教員と共同で展開した実践を報告した。パソコンやデジタルカメラを使って、できる限り「実物に近い新聞」を目指した「大島新聞」（タブロイド判）を2回発行した。手書きではなく、デジタル機器を使うことによって、子どもたちに「自分のものなのに、自分のものでなくなっていく」感覚を味あわせ、新聞と情報に関する認識（編集・加工など）を形成することを意図したという。また、新聞の制作過程を追体験させることで、情報が構成されて発信されていることに気づかせることも目指した。実際に子どもたちが、この認識に接近したかどうかは、さらに研究を継続して検証していくとした。

（司会 福田徹・柳沢伸司）

## 日本NIE学会 第6回総会報告

11月15日に開催された第5回総会において以下の議案の審議と報告が行なわれました。

1. 平成19年度決算報告および会計監査報告
2. 平成20年度事業計画および予算
3. 第6回学会開催地
4. 財団との共同研究について
5. その他

### 1. 平成19年度 収支報告（平成19年4月1日□20年3月31日）

借方				貸方	
項目	予算案	摘要	金額(円)	摘要	金額(円)
会議費	350,000	常任理事会(9/2) お茶代	1,512	(収入の部) 平成18年度より繰越金 会費 ・法人会員 19社×@50,000円(19年度分) ・会員会費(一般) 1人×@5,000円(17年度分) 16人×@5,000円(18年度分) 293人×@5,000円(19年度分)	2,588,170
		常任理事会(9/2) 交通費補助	126,000		
	150,000	常任理事会(3/15) お茶代	1,550		
		常任理事会(3/15) 交通費補助	163,000		
		第3回理事会(11/17) 昼食代	28,000		
		小計	320,062		
会報 (3回分)	150,000	第6号 会報印刷代	34,650	950,000	
		第7号 会報印刷代	34,650		
		第8号 会報印刷代	42,300		
		小計	111,600		
会誌	450,000	第2号(600部)印刷代	430,800	5,000	
		小計	430,800		
通信・連絡費	300,000	宅急便他運賃料金(ヤマト運輸)	205,037	80,000	
		郵送料	5,730		
		小計	210,767		
第4回大会運営補助費		第4回大会総会費補助	150,000	1,465,000	
		小計	150,000		



会議費	350,000	常任理事会 (9/2) お茶代	1,512	4人×@5,000円 (20年度分)	20,000
		常任理事会 (9/2) 交通費補助	126,000		
		常任理事会 (3/15) お茶代	1,550		
		常任理事会 (3/15) 交通費補助	163,000		
		第3回理事会 (11/17) 昼食代	28,000		
	150,000	小 計	320,062	1人×@5,000円 (21年度分)	5,000
会報 (3回分)	150,000	第6号 会報印刷代	34,650		
		第7号 会報印刷代	34,650		
		第8号 会報印刷代	42,300		
		小 計	111,600		
会誌	450,000	第2号 (600部) 印刷代	430,800		
		小 計	430,800		
通信・連絡費	300,000	宅急便他運賃料金(ヤマト運輸)	205,037		
		郵送料	5,730		
		小 計	210,767		
第4回大会運営補助費		第4回大会総会費補助	150,000		
		小 計	150,000		
各種委員会費	220,000	運営委員会費	0		
		企画委員会費	15,900		
		研究委員会費	19,679		

		機関誌発行委員会費	36,180	1人×@5,000円 (22年度分)	5,000
		小 計	71,759		
理事選挙費	250,000	選挙投票用紙・公示案内等印刷代	49,770	・会員会費(学生) 9人×@2,000円 (19年度分)	18,000
		投票用紙後納郵便料	8,360		
		選挙管理委員会交通費補助	63,000		
		お茶代	745		
		小 計	121,875		
研究調査費	200,000	研究調査費	200,000		
		小 計	200,000		
出版準備金 (NIE ハンドブック)	1,000,000	小 計	0		
共同研究プロジェクト(財団との共同研究)	500,000	会議費	23,250	書籍売り上げ (19冊×@1,000円)	19,000
		交通費補助	335,000		
		小 計	358,250		

		機関誌発行委員会費	36,180	銀行利息	2,297
		小 計	71,759		
理事選挙費	250,000	選挙投票用紙・公示案内等印刷代	49,770		
		投票用紙後納郵便料	8,360		
		選挙管理委員会交通費補助	63,000		
		お茶代	745		
		小 計	121,875		
研究調査費	200,000	研究調査費	200,000		
		小 計	200,000		
出版準備金 (NIE ハンドブック)	1,000,000	小 計	0		
共同研究プロジェクト(財団との共同研究)	500,000	会議費	23,250		
		交通費補助	335,000		
		小 計	358,250		
事務局経費	300,000	アルバイト代	120,000		
		振込手数料	2,100		
		「NIEハンドブック」執筆希望者の募集案内印刷代	12,600		
		事務用品	692		
		封筒印刷代	31,080		
		第4回総会資料印刷代	21,000		
		会計監査のための交通費(8/31)	5,000		
		会員名簿印刷代	76,650		
		小 計	269,122		
予備費	958,170		0		
		支 出 合 計	2,244,235		
		平成20年度へ繰越金	2,913,232		
合 計	4,828,170	合 計	5,157,467	合 計	5,157,467

平成20年3月31日

\* 出版準備金100万円は、平成20年度繰越金に含む。

## 2. 平成20年度事業計画

### ■ 平成20年度事業計画

平成20年	4月19日	第2回財団との共同研究プロジェクト会議(大阪)
	6月28日	財団との共同シンポジウム開催(東京)
	6月30日	学会報第9号発行(第5回大会1次案内)
	8月1日	第3回財団との共同研究プロジェクト会議(高知)
	9月7日	常任理事会(日本新聞協会大阪事務所)
	10月	学会報第10号発行(第5回大会2次案内)
	11月15日□16日	第5回大会(総会、理事会)

11月16日	第4回財団との共同研究プロジェクト会議（福岡）
11月	学会ハンドブック発行
12月	学会報第11号発行（第5回大会の報告）
平成21年3月	学会誌4号発行予定

## ■ 平成20年度予算

### 収入の部

会員会費	1,560,000	(390人×0.8×@5,000)
法人会員会費	760,000	(19社×0.8×@50,000)
平成19年度繰越金	2,913,232	(出版準備金100万円を含む)
合計	5,233,232	

### 支出の部

会議費	350,000	
会報	150,000	(9、10、11号)
会誌	450,000	(3号)
通信・連絡費	250,000	
大会運営補助金	150,000	
各種委員会	220,000	
研究調査費	200,000	
出版費	2,000,000	(NIEハンドブック)
共同研究プロジェクト	500,000	(財団との共同研究)
共同シンポジウム	45,000	
事務局経費	300,000	
予備費	618,232	
合計	5,233,232	

## 4. 第6回学会開催地について

2009年度の第6回大会は、東京（東洋大学白山キャンパスおよび東京都立小石川中等教育学校）で開催予定です。

日程は11月21日（土）□22日（日）、21日には小石川中等学校でNIE公開授業をおこなう予定です。

詳細については、あらためて会報でお知らせさせていただきます。

## 会報ニュース

### ■ 「情報読解力を育てるNIEハンドブック」発行

学会研究委員会（委員長 小原友行先生）のお世話で標記ハンドブックを明治図書から発行しました。会員の皆様には1冊ずつ配布いたしました。（ただし、07年度の会費納入者および08年度11月までの会員申込者）

発行部数は1,100部、定価3,860円＋税。まだ少し残部がありますので、会員の皆様には3,400円（送料込み）でお分けします。発行にご尽力いただいた編集委員、および執筆者の皆様には御礼申し上げます。（運営委員長 枝元 一三）